

景観フォーラム

巻頭言

あけましておめでとうございます。現代の若い人たちはこれを“あけおめ！”というらしいですね。私も来年からこの言い方を使ってみようかと思いますが、まだまだそういう言葉を使えない何かがあります。

ところで、年初めになるといつも思うことですが、今年は何のような一年間になるかでしょう。約20年前の阪神大震災、並びに4年前の東日本大震災の被災者は年頭に大地震があるなどとは思ってもよらなかったと思います。自然災害によって被災された人々の被災の原因は殆どが人災に起因するものです。人類は未だに自然災害を根本的に防ぐことはできないようです。地球に地球大の星が大接近して突然衝突の憂き目を起こしたら、人類は対処できますでしょうか。それらのことを考えるとアインシュタインの「原子の力を解き放ったことで、私たちの思考様式を除いて何もかもが変わってしまった。かくして、私たちは前例のない破局に向かってふらふら流れていく。」という言葉は彼の晩年に吐いたものであり、空恐ろしい気がいたします。アインシュタインの言葉は、晩年を意識してか、自分が創り出してしまったものに対してかなりの悲哀感があったと感じざるを得ません。

さて、このような予言めいた言葉に私たち「市民」はどう対処すればいいのでしょうか。アインシュタイン(1879-1955)は21歳で20世紀を迎えて、ウィーンの爛熟した文化を味わった矢先に、第1次世界大戦、そしてヒトラーを生み出した第2次世界大戦に身を持って経験したのですから、このような言葉が出ては仕方ありません。少なくとも私たちの第2次世界大戦後約70年は大戦というような大きな戦争は起こしてはおりません。これは「市民」が声を大きくして「平和」の大切さを叫び続けてきたからでしょう。良き景観の創造を思う時、私たちは平和を前提にしております。決して戦争ではありません。これは確信を持って言えますが、平和がなければ良き景観も作り上げることはできません。本年もよろしくお願い申し上げます。

(斉藤全彦)

〈予定〉

景観セミナー

- ・1月21日(水) 18:30~20:00 「自然災害と人災」講師 日本自然保護協会 辻村千尋氏
- ・2月18日(水) 18:30~20:00 「民芸と景観」講師 日本民芸館 杉山亨司氏
- ・4月22日(水) 18:30~20:00 「都市社会学における景観」講師 駿河台大学 熊田俊郎氏
- ・6月17日(水) 18:30~20:00 「未定」

景観まちあるき

- ・3月21日(土) 江ノ島
- ・5月23日(土) 小田原(セミナーとまちあるきを一緒に実施致します。午後一杯かかると思います。)

臨時理事会

- ・1月28日(水) JICA研究所 18:30~

定例理事会

- ・4月28日(火) JICA研究所 18:30~

世界の景観めぐり 第8回

米国の街並みと住宅が美しい理由—日米の住宅に対する考え方の違い—

NPO法人日本景観フォーラム 理事 (株) グローバル研修企画 代表 小林 均

日本では住宅は車などと同様に償却資産と考えられ、木造住宅であれば20年で資産価値なしとみなされ、中古住宅の売買の際は土地のみの価値で価格が決められる場合がほとんどである。古い住宅は壊して建て替えるのが当たり前になっている。一方米国では、住宅の建て替えはほとんど行われず、外部のデザインはそのまま残し、古くなった場合には補修し、転売する場合は内部のみリモデリング（リフォーム）を行い、住宅の価値を高めて売りに出す。そのため、日本での住宅流通に占める割合は、新築住宅が8割、中古住宅が2割であるのに対して、米国では逆に中古住宅が8割、新築住宅が2割である。

ここで中古住宅という言葉を便宜上使っているが、車については日本で新車以外を中古車と呼び、米国でもUsed Car（＝中古車）と呼んでいるのに対し、米国では新築以外の住宅を中古住宅（＝Used House）とは言わず、Existing House（既存住宅）と呼んでいる。このことは日米の住宅に対する考え方の違いを象徴的に表しているといえる。

米国人にとって住宅は利益を生み出す資産と考えられている。住宅の資産価値を高めるため、街並みの美しさには最大の注意を払う。多くの住宅地にはHOA（Home Owners Association＝住宅所有者組合）があり、住宅の資産価値を損なう街並みの美しさを壊すような行為、例えば芝を刈らない、洗濯物を外に出す、ゴミを出す、古くなった外壁を塗り替えない、勝手に建て替えて住宅のデザインを変える、等の行為に対しては厳しい制限があり、違反した場合には罰則が加えられる。そのように美しさを保ち、樹木の生長も相まって熟成した住宅地は評判をよび、そこに住みたいと思う人たちが集まり、住宅は購入したときよりも高い値段で売買されるようになる。そのようにして、米国人は子供の成長等ライフステージの変化に伴って、引っ越しを繰り返すことができる。

米国人は貯金をしないので浪費家と言われるが、住宅が利殖を生み出す貯金の代わりといえる。日本人にとって住宅を売ることは、買った時よりも必ず値下がりするので、損をすることであるから、おいそれと引っ越しはできない。住宅は一生に一度の買い物とは、日本の住宅問題を覆い隠すための都合の良い言葉であろう。日本でも最近「長期優良住宅」ということが国土交通省主導で言われるようになってきたが、趣旨は100年ぐらい持つ頑丈な住宅を作りましょう、ということで、資産価値を高める重要な要素である住宅のデザインや街並みの美しさなどには一切触れられておらず、まったく片手落ちと言わざるを得ない。

日本でも美しい街並みや美しいデザインの住宅が精神的な価値のみではなく、金銭的な価値をも生み出す可能性のあることを実例を持って示すことが必要である。



築100年ほどの住宅が立ち並ぶウィスコンシン州 コーラービレッジ



ワシントン州イサクワハイランドの新築住宅

グルジアのまちなみ (下)

東野 允彦

今回は、グルジアの首都トビリシ、第2の都市クタイシの様子を紹介したい。旅の移動手段は、バス、地下鉄が中心だったこともあり、行動範囲は狭い。2つのまちの中心部のこと、ということをお断りさせていただきたい。



グルジアの母像へのロープウェイ

トビリシは、ムテックバリ川を底として、東西をM字のように山に囲まれている。南北の移動は平らで移動が便利だが、東西の移動は坂道やムテックバリ川があり少し不便であった。

道路は石だたみの道も多い。例えば、ルスタヴァリ通りはトビリシの中心部を南北に貫く大通りで、交通量も多いが石だたみの箇所が多く、古いまちの趣を感じる。通りには、劇場などの文化施設や国会などの行政施設があり、トビリシを代表する通りの1つになっている。

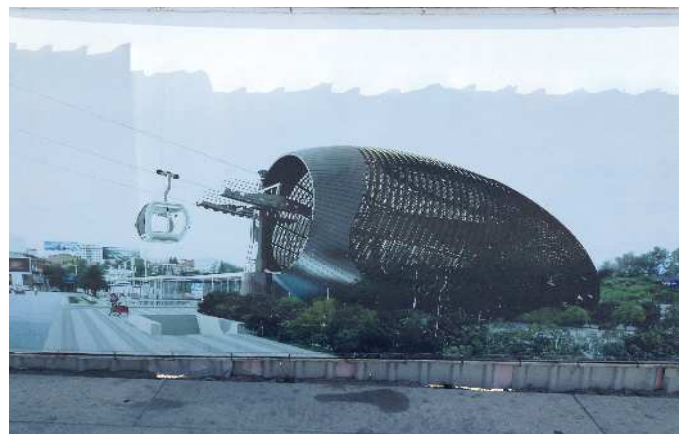
まちの再開発とともに、主要な観光地（例えば、スィオニ大聖堂やメテヒ教会など）の道路やまちなみの整備を行ない、教会の雰囲気にあった統一感のあるまちなみになっている。また、車の進入を制限しているせいか（細い坂道や階段が多いこともある）、中世のまちを散策しているような気分になる。

山に囲まれている地形からか、ケーブルカーやロープウェイを観光に活用している。山頂に遊園地があるムタツミンダ山頂へのケーブルカー、メテヒ教会近くの広場からグルジアの母像のある山頂までを結ぶロープウェイ。そして、さらに現在計画中のロープウェイもあった。これらのケーブルカーは、バスや地下鉄と同じICカードで乗ることができる。

計画的に開発されている場所がある一方で、ツミンダ・サバメ大聖堂周辺のように、ソ連時代以前に作られたような古いレンガ造りの家が中心で半壊しているような住居が多くあり、手直しせずにそのまま使っている。ちなみにトビリシ郊外にはソ連時代の建物と思われる古い団地も多くあった。野菜などを売るバザーなどは市民の生活を感じられる。



スィオニ大聖堂の周辺



計画中のロープウェイ



ソ連時代の建物を利用した商店街



バグラト大聖堂

また、M字型の地形で水が集まりやすいのか、ところどころで水が湧いており、教会では聖水として、まちなかでは公共の水飲み場として使われていた。湧水を観光資源にできそう。

クタイシも道のまん中から水が湧くほど、水が豊かなまちだった。トビリシと同じように川を中心に山に囲まれた地形、コーカサス山脈が近く、夏でも気温は低い。

クタイシ駅からまちの中心部まで循環バスが走っている。高層建築物は少なく、ソ連時代は自動車工業で有名だったとはちょっと信じられない。

世界遺産のバグラト大聖堂は山頂にあり、中心部からは住宅街にある坂道を登る。この道は、古い道路を再現していて、道のまん中に溝のある石だたみで歩きにくい。今年の夏に行った時は、バグラト大聖堂は大規模な改築をしていた。

壊れかけた石造りの教会に、金属とガラスの部分が增设されていたバグラト大聖堂（エレベーターもついていたかもしれない）。こういった増築方法を見ると、トビリシでよく見た崩れかけた石造りやレンガ造りの建物を現代化する1つの手段だと思った。過去の建築物を利用して、復元するのではなく、新しい価値をつくる方法。世界遺産には有効ではないかもしれないが…。

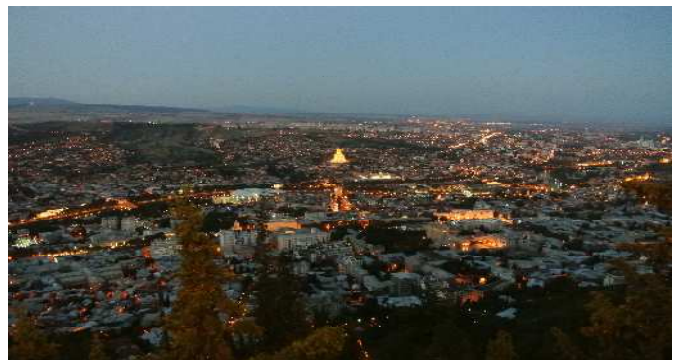
最後に、クタイシと同じく危機にさらされている世界遺産をもつムツヘタについて。世界遺産のスヴェティ・ツホヴェリ大聖堂を中心に、観光客目当てにお土産を売る店がならび、観光地らしいまちづくりがされていた。トビリシからバスで30分ほどという立地のよさもあって、国内外からの観光客は多い。

そこで乗ったタクシーの運転手さんから聞いたところによると、まちへの車の出入りを制限するため、ゲートのバーを上げたりや鎖を下げるリモコンを持つ者以外、車でまちに入ることはできない仕組みを行政でつくっていた。

まちなみについて書かせていただいて、まちを歩きまわったつもりでも、実はまちをよく見ていないことを実感した。まず視点がはっきりしていない。

今年の夏もグルジアへ行く計画を立てている。それまでに、当フォーラムにて、視点を学ばせていただき、昨年とは違った目でグルジアのまちを訪れてみたい。今年も、よろしく願い申し上げます。

(ひがしのまさひこ・会社員)



ムタツミンダ山頂からの眺め

「ポーランドとリトアニアを旅して 第2回」

NPO法人日本景観フォーラム 吉川 謙太郎

リトアニア最初の訪問地であるカウナスは、一時は首都でもあったリトアニア第2の都市だが、「古都」ともいえる風情をもった街。第二次世界大戦中、多くのユダヤ系難民を救うために杉原千畝がビザを発行した旧日本領事館は、杉原記念館として保存されている。戦後は、数家族が勝手に住んでかなり傷んだようだが、やがて買い上げられ、現在は寄付金で運営されているとのこと。リトアニアの方々は総じて親日的であるが、杉原千畝の影響が大きいといわれる。



カウナス

主要な道路にはトラムやバスが縦横無尽に走り、ところどころにスーパーマーケットもあり、かなりの活気にあふれている。一方、ちょっと脇に入ると、舗装の剥げた穴だらけの道路があり、車が上下に激しく揺れる。ここでは、ソ連時代にできた集合住宅に住む御家族のもとでホームステイをし、とても暖かく受け入れていただいた。「ソ連＝粗悪」というイメージが強いが、エレベーターがなくて荷物の持ち運びが大変であったほかは、短期間滞在者には特に気になることはなかった。そんなところからも、ソ連との断絶と連続を感じることができた。

アリートゥスという街にも行った。ここには、自宅の庭を日本庭園にし、盆栽を教えている方がいる。兵士として参加したアフガン侵攻の際に負った心の傷を、日本庭園が癒やしてくれたのが日本との出会いであるという。そのお話を伺い、表面に見えているもの、見慣れていると思っているもの、当たり前だと思っているものの奥にある何ものかを見ようとする姿勢を持てるとよいと思った。



アリートゥスの日本庭園





保養地ドルスキニンカイには、日本に留学経験のある先生が日本のことを教えている学校がある。その児童・生徒たちにとって、日本は憧れの地ということだ。こんなに遠く離れた場所で、日本のことを一生懸命に知ろうとしている子どもたちがいることに素直に感動した。また、郊外にはソ連時代にリトアニア各地に設置されていたレーニン像を集めた公園がある。いつもは立っているレーニンだが、面白いことに、保養地ドルスキニンカイでの彼は座ってリラックスしているとのことだった。

最後は首都ビリニュス。KGB本部をそのまま博物館にしたKGB博物館前に、子どもたちの絵が展示してあった。絵の題材と展示の場所に、大国に翻弄されてきた祖国の独立について伝えていこうとする大人たちの強い意志を感じた。

リトアニア最後の夜に、興味本位で日本料理店に入ったが、そこに飾ってあった日本の写真には、富士山等の「予想通り」のものに混じって、満員電車の写真があった。経済規模では日本と断然の差がある人口300万の小国が何となく豊かに思えた理由のひとつを見た気がした。



KGB博物館前の子どもたちの絵

<LFJブックレビュー41>

『屋根』伊藤ていじ文・高井潔写真

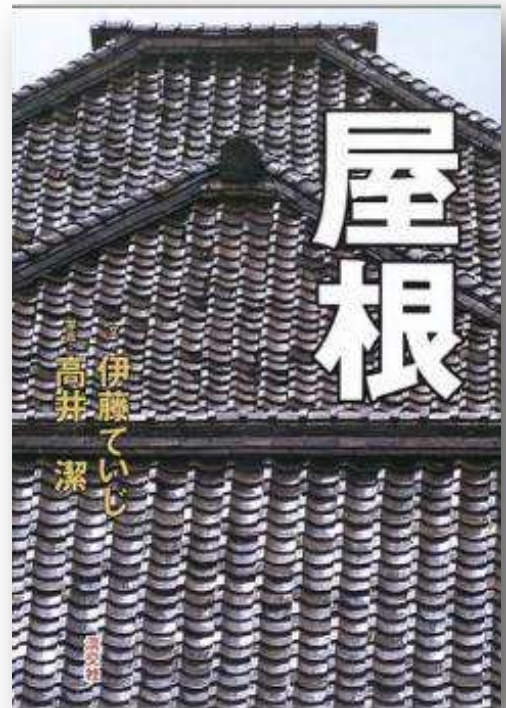
淡交社 2004年刊

屋根のない家を想像できるだろうか。「私の家には屋上はあっても屋根らしきものはありませんよ。」とマンション在住者からの声。マンション建設が当たり前のように席卷している現在「オフィスビル・諸官庁・アパートの殆どすべては、基本的には箱であり、当然の結果として屋上は水平である。」明治時代に京都を訪れた西洋人は朝靄の棚引く京都の薄暗い屋根の美しさに言及しているが、“近代化”が齎した風景を見てどう思われるだろうか。

しかし、屋根は屋（家屋）の上にあるのに、なぜ屋の根などというのであろうか。屋根という漢字は古代中国には存在しないということは、「屋根はわが国での宛字のようにみえる。」そこで、根とは何かである。「元来はナ（大地）の意味で、大地にしっかり食い込んでいるもの」を示し、ネは植物の根に通ずるものであり、「原始時代の竪穴住居の屋根につながるものであり、ここでの屋根の垂木は大地にくいこんでいる」ということになる。その後、著者は屋内から屋外へ出るとは屋根の中から外へ出ることとして「屋根が空間を作る」に言及し、屋根は構造的なものであると同時に社会的な存在であるとし「屋根はなぜ大きい」にこたえている。そして、屋根が「身分を象徴させる」という議論に、「卯建があがる」とはどういうことか、「棟仕舞は棟飾りでもある」、「軒下で関係づける」というまさに私たち日本人がコミュニティづくりとどう関わってきたのかという文化論そのものを探求する。これはまさに“屋根から考える景観まちづくり”でもある。

この書は、高井潔氏による写真が全体の8割方を占めており兎に角美しい。『民家』（上）（下）が2002年に発表され、北は北海道から南は沖縄までの民家を写真集にして、重要文化財を含めそれぞれの個人所有の民家の状況を事細かに報告している。恐らくこの『屋根』は、その活動の中から、屋根だけを取り出し、著名な建築史家であった伊藤ていじ氏に文章を頼んだのではないかと推察する。思うに日本全国の民家の写真撮りをしながら、“屋根”こそが、日本人の文化の原点であると思い『屋根』を新たに出版したのではないか。

人類という動物は、雨、風を防ぐ目的で洞窟などを棲みかとして暮らして来た。ほんの10万年前にはこれが通常的生活であったろう。ほんの10万年とは、放射能汚染がなくなる時間である。人類は10万年単位でものを考えねばならないのだろうか。考えてみれば、原子力発電所という建物には屋根はないと見える。ということは原子力発電所という建造物は「大地にしっかり食い込んでいるもの」という建物ではないと思われる。（斉藤全彦）



天地玄黄 ④「移りゆく風景・消えゆく追憶～ 後世に残すべき景観を考える」

現在の風景から同じ場所に過去何が建てられていたか、皆さんは思い出せるだろうか。近年の都市開発はめまぐるしい。

特に郊外では、商業施設の建設や住宅街の編成、道路整備などの工事が毎日のように行われている。そんな光景を目にするとふと思う。昔は何があったのだろうか、と。私が住んでいる街も、幼少期と比べ大きく変化した。操車場があった場所には駅が新設され、商業施設や公園、住宅街の再編も行われ新しい街が形成されている。幼い時駆け回ったあの街も今はない。記憶を辿っても何をしたかは思い出せるが、この場所に何があって、あの場所にはあれが建っていたなど、街並みを思い出すことは困難だ。いつかは再開発によって、現在の街並みも忘れてしまうのだろうか。今一度、幼少期を過ごした街並みを思い出して欲しい。



街は常に成長している。昨日まであった建物も明日には取り壊され、一か月も経たないうちに新たな建物がそこにある。急激な街の成長の中には、すでに取り壊されているが残さなくてはいけないものも数多くあるのではないだろうか。果たしてその判断をするのは誰か。

土地の所有者？
建設を依頼する行政？
影響を直に受ける近隣住民？

ここで、景観の観点から考えてみたい。

古き良き街並みを昔のままの景観を残していくほうがよいのか？

都市開発を重ね、新しい建築物を増やすことで全く新しい景観を創造するほうがよいのか？

景観というと、古き良き街並みを残していくという考え方が根強い支持を集めているように思う。日本の京都や奈良などが頭に浮かぶが、そのほとんどに共通するのは「侘び寂び」ではないだろうか。装飾をすべて捨て去り、洗練された美しさで人々を魅了している。自然を生かした本来の姿で、風合いや香り、質感など街並みを五感で感じられるものがある。日本人なら誰もが一度は感じたことがあるのではないだろうか。



一方で、都市開発を行い、全く新しい景観都市を形成しているところもある。お台場などがそれにあたるだろうか。現在は「東京リゾー島」として銘打っているが、海を埋め立て一から新たな景観を作り上げた。さらに海外では「ドバイ」や「アゼルバイジャン」が近未来的都市景観として注目を集めている。ここには自然というものはなく、人工的に作られた景観が広がっている。



古き良き景観と近未来的な建築物は全く対照的であるが、それを融合させようとした建築物として「浅草文化観光センター」を題材に、景観のあるべき姿について考えてほしい。

江戸情緒ある浅草の街並みに、突如現れた不安定にも感じられる建物。

皆さんはどう感じるだろうか。もともとの江戸の姿を壊す存在か、より魅力的な街へと進化する存在か。

今後数十年、何百年先に残る景観を考えるうえで、古き良き景観と近未来的景観の兼ね合いは重要な課題ではないだろうか。先に述べた追憶の問題とあわせ、ただの景観として捉えるのではなく、人の心や思いが感じられる景観を残していきたいものである。



(大澤阿蘭)

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan